

## 義務教育課長メッセージ

### ～「新しい学校生活」の確立を～

「分散登校2週目」に入りました。

県内の感染者の状況は、東・南予地域では、一か月以上新規感染が発生していません。中予地域においては、松山市でクラスター事例が発生しました。しかし、同事例に係る関係者については、感染経路を追跡し、濃厚な接触が認められる関係者には、速やかに自宅待機を要請するなどの囲い込みができています。

中予地域以外でも、3月から4月にかけて感染者が複数確認される地域がありました。前述のとおり、現在は、新たな感染者が一か月以上出ていない状況にあります。このことは、徹底した囲い込みによって、感染の拡大が未然に防げたことを物語っています。

「クラスター」と聞くと、大変なことが起きていると思われがちですが、拡がりを抑えるための対策を講じれば、次々とクラスターが発生するような事態にはまず至りません。だから、むやみに恐れることは避け、医療関係者等、献身的にコロナウイルスの対応に当たられている方々や地域の生活基盤を支える方々への敬意と感謝の思いを抱きつつ、県内の感染状況を冷静に見守る必要があります。

一方で、コロナウイルス感染症は収束に向かっているわけではない、県内どこにいても感染の可能性があり、との認識も大切です。

国の懇談会提言等にも示されているとおり、現時点でコロナウイルスを完全に抑え込むことは不可能と言われていています。今後は、経済活動や生活全般にわたり、コロナウイルスとの共存を模索していく必要があります。

教育活動についても、同様です。学校での感染リスクをゼロにするという前提に立つ限り、子供たちは、いつまでたっても学校に通えません。今は、「学校での感染リスクを低減させつつ、段階的に実施可能な教育活動を進めていく」時期に来ています。

先週実施したアンケートの結果からは、子供も、保護者も、登校に前向きになっている状況が見えてきました。

入学式や始業式が行われた4月8、9日に「感染リスクへの不安」を理由に登校しなかった県内市町立小中学生は、およそ90人に一人でした。分散登校の始まった先週一週間、児童生徒が登校する初日の状況を調査したところ、同様の理由で登校しなかった児童生徒は、およそ300人に一人でした。一月あまりの間に、約四分の一に減っています。

この結果は、「正しく恐れる」「新しい日常」といった言葉が次第に浸透してきていることの表れかもしれません。

学校においても、「新しい学校生活」の確立が求められます。

◆臨時休業中の生活様式の変化が子供たちの心身にどのように影響しているかを把握し適切に対応する

◆家庭での学習の状況や定着度を早急に把握・評価し、個人差に対応する

◆登校可能な日数が未確定な中で、学校ならではの学び、学校ならではの行事等をバランスよく進めるためのカリキュラムを工夫する

など、臨時休業に伴う課題は山積しています。

しかし、子供たちが大きな不利益を被ることがあってはなりません。

これまで「例年どおりで良し」としていたことを、これからは変えていく必要があります。各学校においては、完全再開後のカリキュラムはもちろん、行事の在り方、校時間帯、参観日、通知表、家庭訪問、掃除の仕方、、、ほとんど全ての教育活動について、見直しが始まっていることと思います。

考えに行き詰った時には、ネットで先行事例を集めたり、近隣の学校に相談したりされていることでしょう。各学校がより適した方法を探るうえで、この「ふれあい広場」が参考になれば幸いです。良いアイデアについては引き続き、気軽に投稿していただければと思います。

「(子供たちへの)愛」「アイデア」「ICT」を合言葉に、難局を前向きに乗り切っていきましょう。